

歴史と地域社会

——誰がどのように地域の歴史を書いているのか——

東京国際大学 高田知和

1 目的

本報告で明らかにしたいのは、歴史学者の松沢裕作氏の表現に倣えば、これまで行なわれてきた、そして今でも行なわれている多様な「地域の歴史を書く」という営為をそのものとして取り上げることである（松沢、i 頁）。地域の歴史を書くというと、まずアカデミックな歴史家たちが書く論文や本が考えられる。しかし地域の歴史は、そうした専門家だけが書いてきたのではない。郷土史家と呼ばれる人たちがまた多くの地域史（郷土史）を書いてきたが、地域の歴史はこれらの人たちとは違って普段は歴史に関わっていない人たちによっても編まれてきた。というのは、町内会や婦人会の創設何十年史などは同地の普通の人たちがまとめたものであり、これらもまた「地域の歴史を書く」という営為に他ならないからである。

そこで本報告では、最後に事例として挙げたように普通の人たち—専門的な訓練を受けていない素人—が書く地域の歴史について検討を加え、地域社会における歴史意識に接近していく。

2 方法

具体的に取り上げるのは、町内会・自治会等の範域で多く作られている地域史誌である。これは、その地域に住む人たちによって、地域の予算でまとめられる当該地域についての史誌のことである。地域史誌は広く流通することはないが、実は全国到る処で作られてきた。代表的なものでは、沖縄県で「字誌」と呼ばれるのがそれであり、北海道では「開基何十周年記念」で夥しい数が作られてきた。また、長野県のように郷土史が盛んな地域では沢山の地域史誌が作られているし、特にそうした土壌がなくても地域の変容を記録しておきたいとか、行政から奨励されたからなどの理由でも作られてきた。

本報告ではこのうち、若干の事例を沖縄県・北海道・長野県に求めて、それらの相互比較を試みる。というのは、地域史誌が目立って多く作られているところとしては沖縄県と北海道が、豊富な古文書を用いながら分厚い地域史誌を多く編纂してきたところとしては長野県が挙げられるからである。

3 結果

詳細は報告時のレジュメで示すが、地域史誌には特有の性格が種々見出される。また、普通の人たちにとっては執筆だけでなく編集作業も大きな負担であるので、専門業者の役割も大きい。他方、そこで書かれている歴史については、県単位では前述のように大まかな相違が指摘できると同時に、各地区ごとに当然異なってもくるから、具体的には事例を参照しながら指摘したい。総じて、歴史と言いつつも「記録」としての要素が強く、「記録」の残し方と内容に違いが見て取れるものである。

4 結論

近年、「歴史実践」（歴史学研究会）とか「歴史する（Doing History）」（キャロル・グラック）などというように、歴史について柔軟な考え方が出されている。これを社会学から一歩押し進めるためには、地域史誌のようにこれまでアカデミックな歴史学では研究の俎上に載せられてこなかった、普通の人たちによる「地域の歴史を書く」という営為について、その意義を考える必要がある。そしてこのような歴史意識を通してこそ、「歴史とは何か」についても改めて考え直すことが可能となるであろう。

参考文献

キャロル・グラック（梅崎透訳）『歴史で考える』岩波書店、平成 19

松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、平成 27

歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題 第4次 3 歴史実践の現在』績文堂出版、平成 29